
零崎叶識の人間心理

稲生ミズキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎叶識の人間心理

【Nコード】

N7677M

【作者名】

稲生ミズキ

【あらすじ】

零崎一族の末弟を自称する殺人鬼、零崎叶識。零崎双識の依頼を受けて、彼が池袋に来た事で物語は動き出す。裏側の世界に限りなく近いような表側の世界で、彼は様々な人に出会い、その心理に触れていく。戯言シリーズ、人間シリーズとデユラララ！！のクロスオーバー作品。

第一章

0

白が好きなのは、綺麗だから。

だけど、白は汚れやすいのが難点だよ。

1

「……以上を以って、零崎を終了します」

少年はそう呟いて、愛剣の刃に付着した血を薄布で拭う。首に赤い線を引かれた男は、今や物言わぬ肉塊と化し、その場に崩れるように倒れる。頸動脈を切り裂かれ、大量の血を流す死体。少年は見開いたままの目を、手で撫でるようにして瞼を閉じさせる。ふと周囲を見渡せば同じような死体が十数体分、転がっている。

どの死体にも何本もの赤い直線がその体に描かれており、そこからの流血が彼らを死に至らしめた事は想像に容易い。

「さて、一体何だっというんでしょう。この僕が零崎一族と知っていながらにして襲ってくるとは」

全く身に覚えのない襲撃。それも、裏の世界とは無縁そんな人間達が列をなして、だ。

『零崎一賊の者だな？』

全員が同時にそう告げてきたときに、少年は「ああ、これは零崎を始めなきやいけないな」と察知した。色々と疑問点はあったが、そんな事を気にしている場合ではない。大体、彼らが何者かなど、ハッキリ言って関係ないのだ。

「兄さん達の手を煩わせる訳にはいきませんから」

これでまた一つ、愛すべき家賊の為に動く事が出来た。満足そうに頷いて、人気の無い立体駐車場を後にする。

彼の名は、せろさきかなしき零崎叶識という。

この世界のバランスを四分する勢力の中で、暴力の世界と呼ばれる区分。

その中に君臨する殺し名七名、呪い名六名の内が一つ。それが零崎一賊だ。

殺し名としての序列は第三位。理由も無く、呼吸をするように人を殺す。殺し名七名の中で、最も忌み嫌われた集団。

また、他の殺し名とは違い、家賊を自称しながらもそこに血の繋がりは（ごく僅かな例外を除き）存在しない。

流血の繋がりを持ち、家賊の為なら己の命すら捨てる殺人鬼の集団。それが零崎一賊。

零崎叶識は、その末弟として存在している。

事実、年齢は一賊の中で最年少であったし、零崎に目覚めたのも五年ほど前ではあったが、それ以降に家賊になった者達は全員が叶

識より年上だった。

何にせよ、他の零崎達は彼にとって兄や姉として尊敬すべき存在だった。

だからこそ、彼は池袋という街への潜入調査という零崎らしからぬ一賊の長兄たる《マインドレンデル自殺志願》零崎双識からの依頼を引き受けた。

「……まあこの辺も色々と厄介事がありそうですね。そうだ、帰ったら軌識兄さんから貰った資料に目を通さないと……」

家賊の言い付けを良く聞き、必要であれば素直に家賊を頼る。
零崎の末弟は、実に「良く出来た弟」として家賊に愛されていた。

翌日、立体駐車場で起きた大量殺人の記事はニュースに載る事は無く、一部の人間だけがその事件を知る事となる。

例えば、裏社会にも精通している薬剤会社、矢霧製薬。

例えば、池袋を牛耳る暴力団、栗楠会。

例えば、現在は新宿を拠点としている情報屋、折原臨也。

池袋の街は、暴力の世界の住人すら飲み込んで今宵も蠢いている。

池袋某所に存在するとあるマンション、その最上階に位置する2

DKの部屋が零崎叶識の住居だった。

正確に言えば彼の兄が仕事の際に使う部屋の一室で有り、そしてその部屋の持ち主が弟の帰宅を待っていた。

叶識がドアの鍵を開けてドアノブを回すと、何故かドアが開かない。鍵を開けようとした事で、逆に鍵が掛かってしまったらしい。まさか、と思いつつ再度解錠して部屋へと上がる。室内には既に室内灯が付いており、人の気配も感じ取れた。この時点で叶識は口元に笑みを浮かべている。どうやら部屋の中にいる人物に心当たりがあるようだった。

自室の扉を開くと、そこには予想通りの人物がソファーに腰掛けてコーヒーを啜っていた。

「遅かったっちゃな、叶識。どこかで零崎でもしてたっちゃか？」

落ち着いた声色で声を掛けるのは、高級そうなスーツに身を包んだ若いビジネスマン風の男。

声の主を見て叶識は改めて小さく頭を下げる。

「ただいま帰りました、軋識兄さん　いえ、軋騎さん。いらっしやっただんですね」

零崎叶識の兄で有り、そして最大の恩人でもある存在。《愚神礼シムレスバイアス 零崎軋識。

そして、かつて日本を震撼させた空前絶後のサイバーテロリスト集団《仲間チーム》の一員。

『蠢く没落』《街バッドカインド》式岸軋騎に対し、叶識は柔らかな笑みを浮か

べた。

「軋識でいいっちゃよ、叶識。まあこの恰好だとそう言いたくなるのもわからなくもないっちゃが」

苦笑いを浮かべる軋識。彼の普段の恰好（ランニングシャツに麦わら帽子）しか知らない人間には、確かに驚くべき姿だろう。

この姿を、そして式岸軋騎としての顔を知っているのは、一賊の中では叶識だけだ。

「ほれ、俺が調べた池袋の情報っちゃ。読んどけ」

ビジネスバッグから書類の束を取り出し、テーブルへと無造作に投げ置く。叶識もそれを手に取ってザッと眺める。その表情がみるみる内に険しいものへと変わり、書類を捲る手を止めて軋識へと向き直る。

「……何ですか、この人外魔境。僕、双識兄さんから“ちょっと混沌としているけど、普通の世界だ”って聞いてたんですが」

「……レンの野郎、またいい加減な事を……残念ながら、御覧の通りの有様だっちゃ」

「……正直、裏側の世界に居てもおかしくなさそうなのが何人も居ますよ？」

そこに書いてあった調査対象にはとても現実とは思えない事がいくつか書かれていた。

馬の嘶き声の様なエンジン音を上げる謎の黒バイク。人間離れした怪力と耐久力を誇る男。

最近池袋を離れたが、様々な意味で危険な情報屋。双識曰く、特にこの情報屋を重点的に調査せよ、との事だった。

「折原臨也……情報屋を警戒する、というのも双識兄さんらしくないですね」

「いや、この男は警戒しておいた方がいいっちゃよ叶識。俺はこの男の本質は呪い名に限りなく近いと思ってるっちゃ。自分は決して表舞台に出ず、黒幕として裏で糸を引いて楽しむ奴だっちゃ……」

「それは面倒ですねえ……それより気になるのが、こちらの黒バイクなんです」

「ああ、そっちは真正銘バイクモノだっちゃ。まあ、こっちから手え出さなきゃ基本的には無害っちゃよ」

“バイクモノ”と断言されてしまい、叶識は二の句を告げないまま「はあ……」と困ったような相槌を打つことしか出来なかった。池袋の都市伝説として知られる謎の黒バイク。その正体こそ不明だが、バイクもライダーも含めて人間とは思えない行動を度々起こしているという事は資料の面からも伝わってくる。ただ、それだけで彼（？）をバイクモノと断ずるには少々情報が足りない気がした。だが、他ならぬ兄がこう言う以上、特に反論するつもりも無い。いずれどこかしらで遭遇する事もあるだろう。

「何にせよ当面の間は大人しく高校生をしておきますよ。零崎が動く必要以上に事が大きくなりやすいですからね。それに、我々一賊を狙う良からぬ輩も表れているようです」

「俺達一賊を？という事だっちゃ、叶識」

問われ、先程起こった襲撃事件の顛末を事細かく軋識へと伝える。自分達が零崎一族である事を確認して来た事。相手は複数ではあったが、統一感のまるで無い集団だったこと。眼に生気が無く、まるで操り人形のような事であった事。

叶識の説明に難しい顔をしていた軋識ではあったが、首を横に振

つてから小さく溜息を吐いてこう告げる。

「わかった。この件についてはレン達にも伝えておくっちゃ。お前もまた狙われるかもしれないっちゃが、その時は遠慮せずに動け。後始末は俺のツテで何とかするっちゃ」

「了解しました。そう言っていただけると、僕としても動きやすいですから。家賊を狙う輩など、この僕が一つ残らず排除します」

「……お前は本当に真面目っちゃね。もうちょっと肩の力抜いてもいいと思うっちゃよ？」

「抜き過ぎた結果が双識兄さんや人識兄さんではありませんか？」

「……叶識、お前だけはそのまま居てくれ」

キャラ作りを忘れた心底からの懇願をする軋識の姿に叶識は苦笑いを浮かべるしかない。彼が自由奔放な他の兄弟達に翻弄されているのはよく知っている。叶識としても、これ以上軋識の胃と精神に余計な負担を掛けるつもりはない。

「では明日からは来良学園の一年生として、それとなく街の都市伝説や危険人物の情報を探っていこうと思います。無論、我々に仇なそうとする集団についても随時調査を行いますので。……そこで、軋識兄さん。ものは相談なんですが」

「ん？なんだっちゃ？」

「僕は明日から一般人“かのうかなた叶彼方”として動きますので、僕が零崎として動く為の服装を用意していただきたいのです」

そう言つて、ポケットから取り出したメモを軋識に渡す。

「白の学ランに、白いエナメル靴、更に白い仮面か……なんだ、黒バイクへの対抗意識っちゃか？」

「まあそんなとこです。それにこれだけ都市伝説が跋扈してる以上、

僕の存在自体も都市伝説化させてしまった方が最終的に動きやすいかと思ひまして」

「本音は？」

「カッコいいからです」

「……まあ、近いうちに用意しとくっちゃよ。まったく、どいつもこいつも……」

眉間に手を当てて首を横に振る軋識に対し、叶識はあっけらかんとした表情で笑う。

「お手数掛けて申し訳ないとは思っています。ですが、その分きちんと働かせて頂きますから。かの《同志》^{パーティ}の一員、『蠢く没落』《^{バッドカインド}街》式岸軋騎の一番弟子、『欺く善行』《^{エスケープゴート}逃避行路》叶彼方が。そして、」

“彼”は、獰猛な笑みを浮かべて次の言葉を放つ。

「零崎一族の愚かしき末弟、《^{アートライナー}白線細工》零崎叶識が、家賊の期待に万全を以って応えて見せましょう」

こうして、池袋の街に一人の少年が。否、少年の形をした殺人鬼が投げ込まれた。

これは、歪んだ物語。

歪んだ恋と、歪んだ殺意の物語　。

第一章（後書き）

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘など、お待ちしております。

第二章（前書き）

序盤は目立ったクロスオーバー展開は少なくなっております。
本格的なクロスに関してはもうしばらくお待ちくださいませ。

では、よろしければ本文をどうぞ。

第二章

0

狭い世界に広げよう友達の輪。

1

チャットルーム（深夜）

【あ、やっぱりダラーズって有名なんですね】

ダラーズは凄いいんですよ！こないだチャイニーズマフィアと話をつけたらしいし、こないだヤクザが刺された事件も、そのダラーズの下っ端の仕業なんだって！

「甘楽さんってどこからそういう情報仕入れてくるの？」

知り合いに詳しい人が居るから、それですよ

都内某マンション（休日・夕刻）

池袋の情報を、それも出来る限りリアルタイムに近い情報を仕入れる為、零崎叶識は様々なウェブサイトを巡っていた。そんな中で見つけたのが、このチャットルーム。現在の入室者は三名、その中でもこの甘楽^{かんら}という女（？）はかなりの情報を持っているようだ。“ダラーズ”という集団についても、このチャットルームをROMする事で知る事が出来た。どうやら池袋を根城にする集団ではあるらしいが、あまり表だった行動は取っていない、との事だ。

甘楽の言うダラーズの武勇伝に関しては話半分聞く程度で丁度いいだろう。全て伝文系で言っている以上、裏の取れた情報とは考え難い。どちらにしろ、普通の世界で少しヤンチャしている人間達

の集まりである以上、警戒レベルを上げる必要性は無いだろう。

「イマイチ信頼度は低いですが、こういう“喋りたがり”が居るのはありがたいですね。勝手に情報がこちらにやって来るのですから」

チャットルームの画面、右上にあるリロードボタンをクリックしながらそう呟く少年。

全体的に線が細く、小柄で、中性的な顔立ちをした少年。やや長めに伸ばした髪も相まって、どこか女性的な雰囲気醸し出している。

彼の名は、叶彼方^{かのうかなた}。かつて、サイバーネットワーク上で猛威を振るった空前絶後のサイバーテロ集団、《仲間^{チーム}》。

かつてはその一員……でこそ無かったが、限りなく近い位置で小間使いの様な事をしていた経験を持ち、世界中を掻き回した事もある。

『欺く善行』《逃避行路^{エスケープゴート}》という二つ名も、知っている人間こそ極々少数であるものの、畏怖を以って、或いは尊敬の念を以って呼ばれる名である事に違いは無い。……それが現時点で十五歳、当時十歳の少年である事を知ったならば、世界はそれこそ卓袱台をひっくり返した様な騒ぎになったに違いない。

しかし、それすらも裏の顔。或いは、本来名乗るべき名こそ、裏の顔とする事が正しかったのかもしれないが。

彼の真の名は、零崎叶識^{せろはなしき}という。

暴力の世界に名を轟かせる殺し名七名。その中で最も嫌悪される殺戮集団。血の繋がりでではなく、流血の繋がりを以って一賊となる集団。家賊を決して見捨てず、一賊に仇なした者は老若男女人間動物植物の区別無く皆殺しにする後天的な殺人鬼の集団。

彼はその末席に名を連ねる、家賊思いな殺人鬼だ。

「さてさて、黒バイクにダラーズに……出来れば、件の情報屋に付いても話して下さいませんか、甘楽さん？」

その殺人鬼が“叶彼方”の名を名乗り、池袋に潜伏している理由。一賊の長兄であり、零崎一族が誇る三天王が一角、《自殺志願^{マインドレンデル}》と零崎双識からの依頼が原因である。双識曰く、普通の世界でありながらバランスが崩壊しかけている池袋という街に対する牽制の意味合いを持っているらしい。特に、とある一人の情報屋が危険だと。

叶識は兄の依頼を当然のように受け入れ、今ここに至る。彼にとって一賊は全てにおいて優先されるべきものであり、自分の命を含めた世界中の命を天秤にかけても、一賊の命の方が重い、と真剣に考えている。例外的に、かつて《仲間^{チーム}》に所属していた面々だけは、一賊と同等に重いと考えてもいる。

零崎叶識とは 歪んだ家賊愛と、仲間への歪んだ親愛を抱えた、歪んだ殺人鬼だった。

「まあどちらにせよ、大した情報は他に……?!」

チャットルームから田中太郎という人物と、セットンという人物が退室を示唆すると、甘楽が発言をする。

その内容に、彼方の心臓が跳ねた。

そこに映っていた文章が、嘘であってほしい、と心底から願った。何故なら、“絶対に知られる筈がない”情報が、そこに書いてあったからだ。

チャットルーム（深夜）

あー、じゃあ今日はこれで解散ですねー。他に誰も来てないですしー。あ、ロムってる人居るけどw

ドタチンについては、今度お話しますよー。あと、標的の体に線を引く切り裂き魔の話もしますよー

おやすみなさーい

田中太郎さんが退室されました
セットンさんが退室されました
甘楽さんが退室されました

都内某マンション（深夜）

「体に線を引く切り裂き魔……だって……？それは」

背中を冷たい汗が流れるのを感じる。

今まで死線を幾つも潜り抜けてきたが、その際に受けた殺気などとは全く異質な寒気が走るのを自覚する。

頭の中にいくつもの「なぜ？」が浮かんでは消える。

「それは……僕の仕事じゃないですか……」

昨日、自分自身が“零崎”を行った。しかし、その後始末は自身と、兄である零崎軋識の手によって済まされているはずだ。

それが、なぜこの甘楽という人物に伝わっているのか。

勿論別の人物の事を言っている可能性もあるが、「体に線を引く」

という言葉がある以上、自分の事であると見て間違いないだろう。

無数の直線状の刀傷によって殺傷する、それこそが『アートライナー白線細工』たる零崎叶識の殺人の手口だったからだ。

「これはマズいかもしれませんね。何かしら手を打つ必要がありますうです」

ブラウザを閉じて大きくため息を吐く。まずはこの甘楽という人物について調べる必要がありそうだ。

それプラス、軋識に頼んだ品を早めに受け取る必要も。

そう考えると同時に、叶識の携帯電話が鳴った。発信者は、彼の兄　零崎軋識だった。

2

来良学園（朝・HR）

「京都から来ました、叶彼方です。今年から東京でお世話になります。よろしく願います」

入学式もホームルームも特に問題が起こる事も無く終わり、自己紹介も（個人的な感想として）無難にこなす事が出来た為か、叶識は着席と同時にホッとした様な溜息を吐いた。所謂“普通の世界”の住人に混じって上手くやれるか、という懸念はあったが、この時点では“転入生・叶彼方”の仮面はきちんと顔に張り付いているようだった。

何故か女子生徒から獣の様な殺気交じりの視線を浴びた気もするが、叶識は敢えて気にしないでおく事にした。

「なあなあ、転校生くん。スゲーな、女子の熱視線浴び放題じゃんか」

後ろからそんな軽い調子で声を掛けられる。席順はあいいうえお順で並んでいるので、後ろに居るのは叶識の後に自己紹介した男だ。

振りかえった先に居た青年は顔が少々幼く見えるのに対し、茶色に染めた髪や耳に付けたピアスの派手さどこか整合性が取れない。叶識はそんなアンバランスな印象を彼の容姿から受け取った。また、ピアスを見て一人の兄を思い出したが、それは脳内の引き出しにすぐに収納してしまった。そもそもピアスと刺青の兄に最後に会ったのが何時だったか思い出せないし、思い出すなら家でゆっくり思い出した方が良い。家賊の事を考えると、他ごとに気が回らなくなるのは叶識の悪い癖だったし、叶識自身もそれを自覚している。

「えーっと、紀田正臣くん、ですよな？」

「そうそう。ちゃんと覚えててくれてサンキュー。ところで、カナタ。お前もこっち来たばつかみたいだな」

「も？」

「ああ、俺の幼馴染も春から池袋に来たばつかでさ。実は今日、あちこち案内する予定なんだよ。折角だし、カナタも一緒にどうだ？」

初対面でいきなり名前を呼び捨てにしてくる正臣に対し、人によつては馴れ馴れしさに怒りすら覚えたかもしれないが、“叶彼方”は人当たりが良く丁寧な物腰をモットーとしている。所謂キヤラ作りの一環ではあったが、表面的に見ればそれは零崎叶識のパーソナリティと然程差は無い。歪んだ家賊愛を、かつての《同志》^{バディ}への

歪んだ親愛に変えたただけだ。自分が“叶彼方”であると認識しているだけで、自然と殺人衝動すら治まってしまうあたりは、自分の歪みがかかり重症であるのだと叶識は再確認する。

親愛なる兄にして師匠である《シームレスバイアス愚神礼讃》零崎軋識、同時に《バッドカインド街》式岸軋騎が散々に悩んだ自分自身の在り方を、叶識は十二歳になる頃には完璧に使い分けていた。それに至る答えは、必要以上にシンプルだった。

『どちらも大事だから、どちらも同じくらい愛する』

言葉にするだけなら簡単だ。殺人鬼としての顔と（一般からは大きく逸脱しているものの）人としての顔。どちらにも嘘を吐く事になると悩んでいた兄に対し、自称“愚かしき末弟”である叶識はまるでスイッチを切り替えるように、叶彼方としての顔と零崎叶識としての顔を使い分ける。同じパーソナリティを持ちながら、二つの名を全くの別人として分けてしまったが故に出来る芸当であった。

そんな事を出来る人間が歪んでいないとは言えないし、叶識自身も己の歪みを自覚していた。

「お誘いは嬉しいのですが、今日は人と会う予定があるんですよ。出来ればまたの機会に……その、紀田君の幼馴染の方と一緒させていただければ」

「そっかー……残念だな。カナタと一緒に居れば逆ナンパとかかなりされそうだったのにな」

「そんな理由で僕を誘ったんですか、貴方は」

ある意味高校生らしいと言えるかもしれないが。叶識は若干冷たい視線を正臣へと送る。

「いやいやいやそれが全てな訳ないじゃん？こつちで知り合いも居ない、土地勘も無いじゃ色々面倒事が出来そうだし、そう言うのを注意するのが池袋先住民としての俺の役割っていうか？」

「ではそちらの気持ちだけ有り難く受け取っておきますよ」

「そつか。あと、俺の事は正臣でいいから。それと敬語もナシでいいこうぜ？クラスメートだしな」

「うーん、この喋りは僕のキャラですから奪われる訳にはいきませんね」

「自分でキャラ作りとか言っちゃった？！」

敬語をキャラだと断言されて、思わず大きい声を出し担任に注意される正臣に叶識も苦笑いを浮かべつつ前へと向き直る。

この程度でキャラ作りの内に入らないだろう。そう言えるくらい、自分の周りはキャラが濃い連中ばかりだった。

それこそ作ってるんじゃないかと思える人物も居たし、軋識がキヤラ作りしているという事実も知っている。

むしろ叶識は自分が無個性なのではないか、という危機感すら覚えていたのだから。

「まあいいや。それじゃ、また今度な」

「ええ。でも僕も今日は池袋で待ち合わせなので、街中でバツタリ出くわすかもしれませんね」

「そうなたら運命感じちまうな。赤い糸って奴？」

「その意図は其処で切れますよ、たぶん」

いつぞやに殺り合った《シケナルイエロー危険信号》の決め台詞を叶識がパクると同時に、ホームルームが終了する。正臣が勢い勇んで教室を出て行くのを見送り、少し間を置いてから教室を出る。その間にクラスの女子生徒から昼食のお誘いを受けたが、予定がある事を理由に丁寧にお断りし、叶識もまた学園を後にする。

余談ではあるが、叶識の物腰柔らかな態度がクラスの女子生徒の好感度を大幅に上昇させた事を、叶識自身は知らないままだった。

3

池袋（昼）

「ええと、331番……あつたあつた」

ポケットからキーを取り出してその番号を確認すると、叶識は池袋駅構内にあるコインロッカーを開け、白い竹刀袋を取り出した。持ち歩くには少々不便ではあるが、今日会う相手には必要になる為仕方なく持っていかなざるを得ない。本来ならば自宅に保管しておくべき物だし、どちらにせよ“叶彼方”には不必要なものなのだ。

白い竹刀袋の中にあるのは、柄も鞘も白で統一された細身の細身すぎるほどの、西洋剣。

その銘を《アトライナー白線細工》と言う、零崎叶識のシンボルとも言える得

物だった。

叶識がこれを持ち歩く時は、零崎を行う場合か、手入れをする為だけである。今回に関しては、後者の理由が当てはまる。

池袋駅北側地下通路。待ち合わせの定番場所である“いけふくろ”へと歩きながら、叶識は小さく溜息を吐く。心底から憂鬱だ、と言わんばかりに。実際問題、彼にとっては会いたくない人物ランキングを着けるなら、間違いなく上位に君臨する相手に、自分から会いに行くのだから。

「厳正なランク付けをするなら、二位つてところですけどね……まあ、“兎吊木さん”にサシで会うよりはよっぽどマシだと思っておきましょう……」

まるで余命を告げられた重病人のように。或いは世界の終わりを幻視してしまった預言者のように。重い重い足取りで“いけふくろ”へと向かう。気を紛らわすために、“零崎叶識が出来る限り一対一で話をしたくない人物ランキング第一位”に輝いた兎吊木壕輔の事を思い出しながら足を進める事にした。

親愛なる《同志》^{パティ}の破壊工作担当《害悪細菌》^{グリーングリーングリーン}兎吊木壕輔。破壊屋としてのハイエンドと言ってもいい存在であり、その才能とスペックを全て破壊に費やした破壊のスペシャリスト。叶識から見れば、正しく科学者然とした。或いは、エンジニア然とした姿は叶識にはある種の憧れを持っていたのだが、

「なんでもの人、あんなに性格が悪いんでしょうね。それさえなければ、僕としても問題無く尊敬の念と親愛の情を向けられるのですが……」

憂鬱だった気分が完全な鬱状態に入ってしまい、叶識はがつくりと肩を落とす。言葉の暴力というよりも、言葉の拷問で泣かされたこともあったし、人の精神の隙間を突く事に関してはある意味破壊以上の才能すらあるんじゃないかと思う事もあった。

「……やめましょう。これ以上あの人の事を思い出すと僕が精神が壊れてしまいます……そうだ、“姫姉様”の事を思い出しましょう。ああ、姫姉様に会いたいですねえ……昔の姫姉様も素敵でしたけど、今の姫姉様も素敵です……」

叶識が“姫姉様”と呼び、軋騎が“暴君”と呼ぶ青色の少女。

《同志》^{パーティ}の統率者であり絶対者、『歩く逆鱗』《死線の蒼》^{デッドフル}玖渚友。

現在の“零崎叶識”を、そして“叶彼方”を形作る重要なファクターとなった存在でもある。

《死線》としての玖渚友、そして普段の《青色サヴァン》玖渚友。どちらが欠けても、現在の叶識は存在しないと言ってもいい。

「姫姉様に会えなければ、僕は本当に　ただの殺人鬼として死んでいたはずですから」

言葉にならない程に小さな声で呟く。今現在も京都は城咲の高級マンションに居る玖渚友への思いを馳せれば、時間はいくらでも過ぎてしまう。気が付けば、“いけふくろう”は目の前にあった。しかし、待ち人は未だに現れて居ないようだった。

「……ホツとしてしまうのは、僕のせいじゃないですよね？」
「いや、君のせいだと思うのよ、零崎叶識くん？」

背筋が凍った。次の瞬間に叶識は、後ろから腕を回され、上半身を拘束されていた。身動きが、取れない。

「……」

「やあ、遅くなってごめんなさいね、叶識くん？」

「……わかりましたから、離れて下さい。お願いします」

耳元で囁かれる言葉に、僅かに震えながら返事をする。密着した背中には、柔らかな感触がその存在感を誇示しているが、それを楽しむ余裕は叶識に存在していなかった。ふと気付けば周囲の視線がこちらに集うのを感じる。教室で受けた肉食獣の視線とは違い、珍しいものを見る視線だ。

「相変わらず、連れないのね？私がこんなに近くに寄ってるのに、反応が冷たすぎないかしら？」

「近くに寄られてるから、血の気が引いて淡泊な反応になってるんです。分かってくださいお願いします」

叶識は「お願いします」という言葉を多用する事を好まない。嘆願の言葉は繰り返せば繰り返すほど、軽くなってしまうからだ。家賊や同志を頼る事は、必要な事ではあるが、まず自分出来る事を万全にこなし、それでも足りない時に初めて頼るべきだ。だからこそ、叶識は嘆願の言葉を多用する事を好まない。

しかしこの場合、自分を背後から抱き締める女性に対し繰り返されたのは、嘆願ではなく懇願である。

なので繰り返す事に問題は無いのだ。

「仕方ないね？これ以上やって、君に零崎を始められては困ってしまうからね？」

「自分の生死すら“困る”で済ます辺り、貴女も大概ですね……改めまして、お久しぶりです」

ようやく彼女の腕から解放された叶識は、後ろを振り返り丁寧に会釈をする。

背の高い女性だった。前髪の揃った黒髪のロングヘアに、男物のYシャツ、ジーンズ、そして厚底のサンダル。日本人形の様な髪型と男性的な服装がミスマッチした、不思議な雰囲気を持つ女性。その手には真新しい作業用軍手が付けられていて、顔にも化粧つ気が一切ない。しかし、間違いなく美人と言える風貌であつたし、スタイルも抜群だった。

それでも。

それでも彼女が、“零崎叶識が出来る限り一対一で話をしたくない人物ランキング第二位”に輝く人物である事に変わりはないのだ。

「本当に、お久しぶりですね……つみぐちみづみ 罪口未摘さん」

殺し名七名の対極の対極の対極に位置する呪い名六名の序列二位。

武器職人集団、罪口商会第十一地区統括副主任。

そして、《アートライナー白線細工》の製作者。

《武器職人》 罪口未摘は、叶識からその名を呼ばれて満足そうに
頷いていた。

第二章（後書き）

ここで主人公の紹介を。

・零崎叶識
ぜろさきかなしき

年齢：15歳 身長：167cm 体重：53kg

丁寧で物腰柔らかく、礼儀正しい少年。

やや伸ばした黒髪に中性的な顔立ちで、美少年の条件を十分に満たしている。

零崎に目覚めたのはおよそ5年前。時系列的には竹取山決戦終了後、覚醒時に式岸軋騎として行動中だった零崎軋識に保護される。

それから1年後、軋識（軋騎）の助手として零崎一賊としての行動と、《同志》パーティの下っ端メンバー“叶彼方”として行動を開始。

《同志》パーティ 9・5番目のメンバーとして、『欺く善行』《逃避行路》エスケープゴート
かのうかなた 叶彼方としての顔も持っている。

二つの顔を持つ事に何の違和感も持つておらず、スイッチを切り替えるように“叶識”と“彼方”を使い分ける事が出来る。

ある種の二重人格ではあるが、彼自身のパーソナリティは不変であり、愛情の矛先が一賊に向かうか、《同志》パーティに向かうかの違いだけである。

軋識曰く「一人ドッペルゲンガー状態」とのこと。

零崎としての二つ名は《白線細工》アトライナー。

自身が扱う得物も同銘であり、罪口未摘の作品。

鞘や柄まで白一色で誂られた“細身すぎる”両刃の西洋剣。

以上のようになっております。近いうちにオリジナルキャラなどは

まとめて紹介させて頂きます。

では、ご意見ご感想、誤字脱字設定矛盾等の指摘、お待ち致してお
ります。

第三章

0

恋という字と、変という字が似ているのは偶然じゃないはずだ。

1

池袋（昼）

叶識と未摘が並んで歩く様は人眼を引いた。中性的な容姿ながらごく普通の少年と、男性的な服装の美女が並んで居るのだ。普通に並んで居るならば姉と弟のように見えるのだが、未摘がしっかりと叶識の腕にすがりついている為、恋人のようにも見える。この二人は一体どういう関係なのか？という興味が周囲の人物が二人へと視線を向ける理由になっていた。

「うわお？狩沢さん、見てくださいよアレ。なんか異様に絵になる二人が居ますよ。あの二人、絶対タダモノじゃねーっすよ。きっと真夜中に二人で吸血鬼とかゾンビとか狩ってる感じっすよ」

「ん？あー、確かに学生服の美少年にカッコいい系のお姉さんってのは絵になるよね。ラノベに持ってこいの設定だよね。しかも主人公じゃなくて敵役だよ。……殺し屋とか、暗殺者とか」

「狩沢さんも容赦ない事言いますよね。っつていうか、あの袋の中きつと凄い剣とか入ってますよ。そんであの男の子の左手には伝説の使い魔の紋章とかありますよ、絶対」

「ゼ口魔？ねえ、ゼ口魔？ゆまっちダメじゃん、これから電撃文庫

買いに行くのにMFの話したら。浮気だよ、浮気」

視線を二人に向ける人物の殆どが何も言わないのに対し、とある男女の二人連れだけが叶識達にまで聞こえる声量でそんな感想を漏らしていたが、内心叶識は冷や汗を掻いていた。勿論、未摘が自分の腕から離れない為に注目を集めてしまっているという事実に関しても冷や汗の原因になってはいたが、それはもう仕方の無い事なので諦めていた。

（……なんですか、今の二人は。無茶苦茶な事言ってますけど、当たらずとも遠からずという辺りが嫌過ぎます……！）

人の事をゲームやアニメの登場人物のような扱いにされているのも気になったが、その内容が問題だった。

流石に左手の紋章だの何だのは無いが、自分が殺し屋や暗殺者という「暴力の世界」に存在する名前を使って自分を評した。それはつまり、自分の本質をすれ違っただけの相手が少なからず察したという点にある。

（もつとも、殺し屋は勾当、暗殺者は闇口の領分ですけどね……しかし、参りましたね。裏の空気を隠し切れていない証拠でしょうか）

自分の持つ空気をもう少し常人寄りに出来ないか考えていると、未摘が不意に足を止めてとある店へと向かう。腕を組まれている為、叶識も引っ張られるようにその店へと入って行った。

「いらつしやいませ！二名様でよろしいですか？」

「ええ、二名よ？」

「会員カードの方はお持ちですか？」

「持ってないけど、無くても大丈夫？」

「ええ、大丈夫ですよ。では、お時間の方は？」

「3時間のパックで、ペアシートでお願いね？」

「かしこまりました！では、3時間パックでペアシート、71番72番のお席をお取り致しました！お飲み物の方、セルフサービスとなっております。では、ごゆっくりどうぞ！」

「はい、ありがとうございます？」

「……未摘さん、ここですか？」

未摘と店員とのやり取りに呆然としていた叶識が呆れ半分の表情で尋ねるが、未摘は質問に応えることなく指示された席へと向かう。途中、ドリンクサーバーで飲み物を取るのも忘れずに、だ。

「良く使ったんだよ？それにパソコンも完備してあるから、筆談にもバッチリでしょう？」

「だからって品の受け渡しに使いますか？……ネカフェを」

全国にチェーン展開するインターネットカフェの池袋店。罪口未摘が商品の受け渡しに選んだ場所は、とても交渉や密談には向きそうもない場所だった。

2

インターネットカフェ Works Works 池袋店（昼）

『さて、改めましてお久しぶりですね、未摘さん』

ええ。久々に会ったけど、相変わらず可愛いわね、叶識くん？

ブースに入った二人は即座にパソコンを立ち上げ、メモ帳機能を

使って筆談を開始する。基本的に大声で話せない状況下にある以上、こうして疑似的なチャットで話を進める事にしたのだ。

『文章にしてまで疑問形の喋りを継続するんですか？別に普通でいいじゃないですか』

いいじゃない、私のキャラを大事にするのも必要でしょう？これくらいなら、軋識くんほどじゃないよ？

『それを言われちゃこっちも言い返せませんけどね。あと、さっきの可愛いって普通に言うのやめてください。それでも男ですから』
そうね？男らしくなったけど、私の中での叶識くんは3年前のちっちゃ可愛い叶識くんのままね？その面影が残って嬉しいのよ？

打ちこまれる文章を見て、叶識は隣に居る未摘に抗議を込めた視線を送るが意に介す事も無く笑みを浮かべる未摘。彼女とは軋識アイトライナーを介して出会った事がある。というよりも、《白線細工》製作をした際に面会したのだが、それ以来叶識は未摘と何度となくこうして顔を合わせている。基本的には《白線細工》のメンテナンスの為なのだが、それ以上の理由を未摘は持っていた。でなければ、殺し名七名の中で最も忌み嫌われた存在である零崎と好んで面会する必要などないのだ。事実、未摘は軋識と顔を合わせる事は滅多に無いという。

『人間よりも武器を上に見る罪口が、何で僕にそんなに固執するんですか？』

だって、君は人間じゃなくて殺人鬼でしょ？それに、君自身がアイトライナーと同じように、折れず曲がらず、零崎の剣としてあり続けるから、私には君自身が一本の剣のように見えるから、かしらね？ならば、罪口である私が寵愛する理由にもなるでしょう？

『本音は？』

私がシヨタコンだからかな？

『ええ、知ってますとも。貴女が白線細工の見返りに、「性能を試す」って言って僕の体を白線細工で散々切り裂いた挙句、僕を凌辱したんですもんね。当時中学一年生だった僕を！』

凌辱なんてしてないよ？ただ、一緒にお風呂に入って傷を撫でたりディープキスしたりえっちい事をいっぱいしたただだよ？それに、零崎の童貞なんて高価なもの、滅多にもらえないじゃん？

『アンタ、本当に最低最悪だよ！例えばアンタが罪口じゃなくても表の世界で歩けると思えない！！』

罪口未摘の持つ異常性は武器職人としてのそれに加え、その性的嗜好にあった。可愛らしい少年にのみ欲情する、俗に言う重度のシヨタコンだったのだ。これを知っているのは被害者である零崎叶識と、彼女と叶識を引き合わせた張本人である零崎軋識^{アトライナー}だけだった。そして叶識は《白線細工》作製の見返りとして、完成品の試し切りを受け、更にその嗜好の餌食となったのである。

ちなみに、軋識は完全に彼女の嗜好を知った上で叶識と面会させていた。曰く、

「まあ、殺される訳でもないし、家族の貞操に口出しするのは野暮だっちゃ。まあ、悪い事じゃねえし問題ないっちゃよ、たぶん」

という完全な見切り発車で二人を引き合わせ、叶識に忘れたい過去を植え付けたのである。

でも、最後の方は叶識くんもノリノリだったよね？

『それが一番忘れたい記憶なんですってば！！』

あの時の叶識くんが快楽を求めて懇願する顔を思い出すだけで……
じゅるり？

文字だけで涎を啜る音を表記し、わざわざクエスチョンマークを付ける未摘。その隣で一人頭を抱える叶識の姿。最終的に快楽に溺れてしまったという事実が、彼に重くのしかかっている様子だった。また、この話は未摘の口から軋識を経由して家賊へと伝わってしまった、およそ1年に渡って「エロガキ」の二つ名で呼ばれ続けるという叶識にとって人生最大の汚点となっている。不幸中の幸いなのは、その相手が罪口未摘だと知られていない事だったが、当時12歳の叶識が色欲に溺れたという事実が家賊中に知れ渡ってしまった事に変わりは無い。

閑話休題？というわけで、例のものはこれね？

と、未摘みが足元のスニーカーを膝の上に乗せた。それを開くと、中には真つ白な学ランと白の仮面。叶識が軋識を介して依頼した品物だ。一つ一つ確認するように手に取り、その出来栄を確認する。本来ならば試着もしたいところだが、サイズ合わせの失敗など罪口の作品には有り得ないので、その点の心配はしていないようだった。

『上着だけ、それもわざわざ長ランにしたのは？』

出来る限り全身を白に染めるには、裾が長いに越した事はないからね？それに、上着だけの方が取り回しが便利だろう？

『確かに。あと、この仮面どっかで見た事ある気がするんですが…』

…』

半分を白から金色に染めれば、スーパーマリオUSAのアレになるね？

『それだ！』

かつてファミコン世代の少年達に思い出と心的外傷を植え付けた仮面の怪物。壺の中で不気味に鎮座し、ただの背景オブジェクトの

一つかと思えば鍵を手についた瞬間こちらを追い掛け回すアグレッシブな敵キャラ。それを忠実に模した白い仮面は、知っている者には望郷の念とトラウマを、知らぬ者には不気味さを覚えさせるには十分過ぎるデザインだった。

特殊な繊維を用いているから血の汚れは一切付かないよ？私自身、十数回のトライ＆エラーを繰り返した結果が、その白ランだからね？

『つまり既に血を吸った後にも関わらず、この驚きの白さ、と』

撥水（撥血）性を確かめる為に少くない人数の人間が犠牲になったか理解した上で、2人は淡々と確認作業を続けている。殺し名と呪い名にとっては些細な事なのだ。叶識が依頼品を受け取り、剣道袋を未摘に渡す。未摘も慣れた手つきで剣道袋から《白線細工^{アイトライナー}》を取り出し、鞘から抜いた。狭いスペースなので完全に鞘から抜く事は出来なかったが、武器職人である罪口未摘みならば、ちょっとした点検ならばこれで事足りてしまう。

大事に使ってくれているようで何よりだね？

『そりゃあね。普通ならば自分の得物を雑に扱ったりしませんよ、普通なら』

普通じゃない人が居たんだね？

その問いに叶識は答えず、ディスプレイ右隅の時刻表示を見るとまだ1時間ほど経ったばかりだった。3時間パックを取った為に、このまますぐに出ると多少損する事になってしまう。仕方なく漫画でも読みに行こうと立ち上がった瞬間、未摘がその袖を引っ張って無理矢理に座らせた。

「どうして私がここを選んだか理解してるわよね？密着度が嫌でも

上がるでしょう、ここなら？」

「……なるほど」

「対価は軋識くん経由で頂いてるけど、まだ少し足りないのよね？」

「……どうぞお好きに」

こうして残りの二時間、叶識は未摘の玩具として過ごす事になった。最も、ネットカフェの禁止行為に反する行為は無かったが。

3

池袋（夕方）

ネットカフェを後にした叶識と未摘が街に出た瞬間、都市伝説は彼らを待ち受けていたかのようにその姿を現した。

「……！！」

「……あれは？」

車の間を縫うように駆け抜ける黒い影。

ヘッドライトの無い漆黒のバイクを操る、人の形をした“影”が音も無く走り抜けていく。

「今のが、池袋を賑わす黒バイクですか……」

「不思議なバイクだね？エンジンやブレーキ音すら無い……どういう技術で作られているのか、興味が沸くわよね？」

二人の興味はそれぞれ、ライダーとバイクに分かれたようだったが、しかし、既に走り去ってしまった存在に対しどうする訳でもなく、

歩き出す。会話らしい会話は殆どなく、交差点の一角まで辿り着いたところで未摘が掴んでいた叶識の腕を放す。

「さて、私はそろそろ行くわね？それでも、多忙なのよ？」

「ええ、分かってます。今日はわざわざ有難うございました」

そんな短い挨拶を交わし、未摘は去って行った。終始ペースを握られていた叶識は心底から安堵したように溜息を一つ吐く。

「おい、カナター！」

次の瞬間、気安い調子で呼び掛ける声に叶識が振り返ると、そこにはクラスメートの姿があった。

「ああ、正臣じゃないですか。偶然ですね」

「それはこっちの台詞だよ。昼に行ってた予定って終わったのだったのか今の美女誰？会う相手って今の人？彼女か？」

「ま、正臣！」

矢継ぎ早に質問を繰り返す正臣を止めようとするも、完全に勢い負けてしまっている少年が一人。

「落ち着いてくださいよ、正臣。ほら、後ろの幼馴染さんが困っているじゃないですか」

「あー、悪い悪い。同級生が綺麗系の美女と一緒に居るの見たら居ても立っても居られなくてな。紹介するぜ、幼馴染の竜ヶ峰帝人。こっちが同じクラスの叶彼方な」

そう言ってお互いに初対面の相手に対して、軽い会釈をする。身長は叶識と大した差は無さそうだ。

「えっと……初めまして、竜ヶ峰帝人です。君も来良学園の一年生なんだ？あと、敬語は使わなくてもいいよ？」

「こちらこそ初めまして。叶彼方と言います。ええ、同級生ですね。それと、僕の敬語はキャラ作りの一環ですのでお気になさらず」

同級生同士の簡単な自己紹介を済ませると、それを待っていたかのように正臣が叶識に近付いて、

「さあ、自己紹介も終わった事だし、さっきのお姉さんとの関係を教えて貰おうか？」

「紹介する程の関係じゃないですよ。従姉妹の方でして、引っ越し前に忘れてしまった服を持ってきて貰っただけですしね」

そう言っただけでスーツケースを見せれば、帝人の方は納得した様な表情を浮かべて居ていたが正臣は不満があるらしく、

「その割には随分近距離だったと思うんだが？」

「仲がいいだけです。さて、僕はもう行きますね。スーツケース抱えてうろろしてたら疲れちゃいますから」

「……上手い事かわされた気がするが、まあいいか。そういえばお前、どこに住んでるの？」

正臣の望む回答では無かったようだが、ある程度納得してくれたらしく話を変えてきた。ふむ、と叶識が小さく頷きながら考える。さて、どう誤魔化した物か。正確ではないが、嘘でもない。そう説明するのがこの場合はベストだろう、と判断して口を開く。

「兄が仕事で使っているマンションに。忙しい人なので、実質一人暮らしみたいなものですけどね」

「マンション……いいなあ。僕なんてアパートだよ」
「掃除の手間が増えるだけですよ。それに、兄の仕事上の書類なんかもたくさんありますから、友達も呼べませんし」

さりげなく自宅に來られないように予防線を張りつつ、叶識は“普通の会話”を楽しんだ。

4

池袋（深夜）

立体駐車場の一角に、重低音を響かせる一台のワゴン車が停車している。窓やフロントガラスをスモーク加工されたそれは、あからさまなまでの改造車であり、これが街中であれば誰もが顔を顰めながらも視線を逸らす代物だった。また、乗っている人物もまた同様であつた。アイドリング音と、カーステレオの爆音が人気の無い

「チツ、面白くねえよな。門田の野郎、“ダラース”の顔役気取りやがって」

「だからって今更手出しもできねえだろ。“ブルースクエア”は潰れちまって、俺らも行き場がねえんだからよ」

「ひ、ひひ……」

助手席でダッシュボードに足を投げ出して悪態を突く男、運転席で煙草を吸っている男、そして後部座席で不気味な笑みを浮かべる男。彼らは少し前まではブルースクエアというカラーギャングの一員であつたが、とある事件によってチームは壊滅。チームの名を売りにしていた彼らは、あつという間に誰からも相手にされないチン

ピラ集団と化していた。

「ひひ……なあ、さつさと犯っちまおうぜ……！俺、もう我慢できねえよ……！」

「落ち着けよ。時間なんざたっぷりあるしよ、寝てる奴やっただけで反応無くてつまんねえだろ？」

「起きたらやられてる、つてのも面白そうだけどな？ギャハハハ！」

シートが折り畳まれ、スペースのある後部座席には一人の女子高生の姿があつた。両手両脚を手錠で拘束され、薬品か何かを用いて眠らされているのか、身動き一つしない。彼女は不幸にも彼らに目を付けられ、拉致されたようだった。彼女が目覚めた時、彼女の不幸は始まるのだ。

「……おい、誰か来るぜ」

「ああ？どーせ車取りに来た奴だろ？ほっとけほっとけ」

立体駐車場の四階には彼らのワゴンの他にも数台の車がある。サイドミラーで人影を見た助手席の男がそう言うも、運転席の男は気にも留めず煙草を灰皿へと押し付けた。後部座席の男は目の前の少女を犯す事しか考えておらず、返事すらしない。

しかし、そのサイドミラーに映った人影は他の車ではなく、彼らのワゴン車へと向かって歩み寄って来た。助手席の男が明らかに苛立った表情を浮かべて、車を降りる。

「おい、コラ！テメー、俺らになんか用でも……！？」

男の怒声は途中で止まる。そして、男は異常を察知する。

「……………」
「な、なんだテメー……！？気味悪い恰好しやがって！」

人影がワゴン車のテールランプに照らされ、その姿を露わにする。白の服に、白の仮面、そして白の棒を持った異様な風体をした存在が、男の目の前に居た。何事も発する事無く、値踏みするような視線を仮面の奥から男へと送っている。

「では」

「おい！聞いてんの……かつ？！」

男の声は、一瞬で絶たれる。

「これより零崎を開始致します」

男が彼の胸倉を掴もうと近付いた瞬間、その首に赤い線が引かれ、大量の鮮血を撒き散らした。仮面の男……否、零崎叶識の持つ西洋剣《白線細工》^{アトライナー}を鞘から引き抜き、一瞬で男の命を奪う。しかしそれだけでは飽き足らず、白線細工の刃が男の体を何度も何度も切り裂いた。無造作に、規則性も無く、男の体の前面をキャンパスに赤い幾何学模様を描くかのように。明らかなまでのオーバーキル。一人の男を、叶識は三十回以上殺すかのように、刃を振り続けた。

ようやく満足したかのように既に息絶えた男の死体を蹴り飛ばし、白線細工をワゴンのリアタイヤへと突き刺してパンクさせる。逃走防止の為だ。一度始まった零崎は、皆殺しを達するまで終える事は

許されない。

「て、テメエ！！な、何してやがる！！」

「ひい……！？ひ、ひ、人殺し……っ！！」

リアタイヤの破裂音に気付いた運転席の男と後部座席の男が降りてくると、すぐさまその異常を察知し身構えた。しかし、この判断は明らかに誤った判断だった。パンクしていようと車自体が動く以上、すぐさま逃げるべきだった。或いは死体を見た時点で警察への通報も考えるべきだったのだ。尤も、彼ら自身が拉致・誘拐・強姦未遂と犯罪行為を犯している為、その判断は最初から出来る筈も無かったのだが。

そして、数十分後。

「以上を以って、零崎を終了致します」

そこには死体が三つ転がっていた。“偶然” 零崎叶識の狩り場に選ばれた場所に、“偶然” 停車してしまっていたが為に、彼ら三人は殺された。体中に数えきれない数の「線」を刻まれて。一方で、車の中で眠らされていた少女は目を覚ます事無く、翌朝に警察に保護される事になる。薬が効きすぎてしまい、深い眠りに落ちたが為にその存在を叶識に知られる事無く、彼女にとって（或いは彼女を含めた全ての女性にとって）最悪の事態を回避する事になり、また叶識に殺される事も無かったのだ。

彼女の存在自体には叶識も気付いていた。しかし、一つの目論見によって彼女は零崎の魔の手が逃れ、生き延びる事になった。

「これを繰り返せば僕も黒バイクさんと同じステージに上げれる筈です。白い切り裂き魔　さて、池袋の街は僕のような、零崎のような存在を許してくれるか……楽しみにしておきましょうか」

敢えて生存者を残す事で、自分の存在を知らしめる。零崎としては落第点の方法だが、池袋という特異点に近い街ではこうした手段の方が有効だと考えた。また、以前自分を襲撃した操り人形達は零崎を狙っている。ならば自分が囷となる事で他の一賊への負担を減らす。

「さあ僕の名を刻みましょう。誇り高き殺人鬼の名を」

駐車場の壁に血文字で描かれた「ZERO」の文字。
それが池袋を震撼させる連続無差別切り裂き殺人事件、通称“ゼロ事件”の幕開けだった。

第三章（後書き）

殺人現場が立体駐車場が続いてしまったのは痛恨のミス。
罪口未摘さんはちよくちよく池袋にやってくる予定です。

ではご意見ご感想、誤字脱字の指摘お待ちしております。

第四章（前書き）

随分と間が空いてしまい、申し訳ありません。ようやく第四話です。そして、続々とあの人達が登場です。

第四章

0

大好きと大嫌いには越えられない壁がある。

1

来良学園（HR）

「そうだ、ナンパ行こう」

「正臣はそればかりですね、ホントに」

正臣の直球すぎる提案にツッコミを入れつつ、叶識は小さく溜息を吐く。学園生活は早くも数日が過ぎ、叶識も“叶彼方”として問題無く普通の世界に溶け込んで生活をしている。“豹変しない二重人格”とも言える叶識（現在は「彼方」の性格が表に出ている為、以降は彼方と表記）にとつては“叶彼方”で居続ける事に負荷は掛かっていない。性格のスイッチを変える事で殺人衝動を抑制するというある種の反則技を使っている事は、零崎叶識にとつては少しばかり後ろめたい気分にはさせているが、現在表に出ている叶彼方にとつては関係の無い話だった。

「なんで二人ともここに居るの……」

帝人の力の無い指摘に彼方は苦笑いを浮かべ、正臣はどこ吹く風という感じでやり過ごす。本来B組の生徒である正臣と彼方が何故

か帝人の居るA組に居座っている。他の生徒がまだ制服を着用しているにも関わらず正臣が早々と私服通学に切り替えた事や、彼方が教壇側から教師用のパイプ椅子を勝手に持ってきて座っている事もあり、クラスの中でも二人は明らかに浮いた存在になっていた。尤も、教師不在でホームルームが行われている為、二人に直接注意する人物は存在していなかった。

教壇側では出席番号一番の生徒が進行役となり、クラス委員決めの真っ最中だった。美化委員、保険委員、風紀委員、選挙管理委員と順番に決まった生徒の名前を確認するように読み上げて、

「クラス委員がまだ決まって居ないのですが、誰か居ませんか？」
「ハ……」

司会者の問いに反応して手を上げようとした正臣を帝人と彼方の二人掛かりで抑え込んだ。彼方が進行役の生徒に気にせず続けてくれ、と目配せを送り事無きを得た。帝人は少し迷っているような様子を見せたが、クラス全体としては様子見、という状態になっていた。そんな状況を打破したのは一人の女子生徒だった。

「……………」

色白で大人しそうな眼鏡少女。園原杏里だった。

「あ、ええと、園原……杏里さん？それじゃ彼女に決定という事をお願いします」

クラスからは興味無さそうな拍手が漏れ、司会進行が男子生徒から杏里へと移った。

「あの、それでは男子でクラス委員をやりたい人はいませんか？」

しかし、反応は鈍い。というよりも皆無。沈黙の中、杏里の視線が一人の男子生徒に向かう。その相手は、先程保健委員に決まったばかりの背の高い男子生徒。矢霧誠二。どこにでもいる青年、という感じではあるが少年という風貌ではない。高校ではなく大学の一年生だ、と言っても通用すると思われる。

帝人は彼女の視線が誠二に向かっているのに気づいたらしく、彼女が彼に気でもあるのか、と勘繰っていると。

彼女は次に、帝人の方へと視線を向けてきた。帝人の困惑をよそに、眼鏡の奥から何かに不安を感じている様な表情を浮かべている。

「俺も罪な男だ」

杏里の視線が外れると同時に、帝人の隣に座っていた正臣が突然
呟く。

「彼女、俺に惚れたな。これから始まる危険にデンジャラスなリスクー^{ナイト}夜に不安を感じている様子だぞ？」

「ごめん、日本語で喋って。だってほら、ここ日本だから」

「僕には正臣の視線をセクハラで訴えたとして、裁判費用がどれくらい掛かるか不安に思った表情に見えましたが」

「ぐ……！帝人は冷静なツツコミを返すしカナタは丁寧に酷い事を言ってくるし……！最初に俺の前に立ちはだかる危機がお前らだとは思わなかったが、愛に生きる俺には親友と新友を殺す事に欠片も躊躇いは無い」

「いや、少しは躊躇おうよ！？」

「新しい友人と書いて新友^{しんゆう}ですか。正臣にしては上出来ですが、文

字にしないと分からないのが減点ですね」

彼女がこちらを見て居た理由を察したのは、結局のところ帝人だけだった。杏里が見ていたのは帝人でも無ければ、正臣や彼方でもなく、正臣が座っていた席。今日を含めて三日連続で欠席している女子生徒の席だった。

「あ、ええと……」

「竜ヶ峰です。下は帝人。帝国の人」

誰も挙手しないのを見た帝人が男子のクラス委員に名乗りを挙げ、戸惑った杏里に何故か正臣が文字を教えると言う奇妙なシチュエーションが展開されながらも、帝人のクラスの委員決めはこうして終了したのだった。

2

清掃時間。正臣が相変わらず帝人と話し込んでいるのを見遣りながら、彼方は人気の少ない方へと移動する。昇降口を抜け、校舎裏のスペースに移動するとポケットから携帯電話を取り出して登録してある番号を呼び出した。通話ボタンを押すまでに二度、三度と躊躇したり、呼び出し音を聞きながら何故か思いつめた表情を浮かべていたり、幸い誰も通り掛かる事は無く

「いやっほー！ たっちゃん、久しぶりー！ 珍しいねー、たっちゃんがあぐつちゃん経由しないで直接掛けてくるなんてさ！」

「お久しぶりです、姉姉様。お変わりはありませんか？」

「うん！ 僕様ちゃんは元気してるよー？ たっちゃんの方こそ、元気

？
』

「ええ、お陰さまで。勿論、軋騎さんも元気ですよ」

電話の相手は、かつてネットワークの世界を荒らし回った電子世界における最強最悪のテロリスト集団の一員にして、その首魁とも言える存在、青色サヴァン、《死色の蒼》^{デッドフル}、そして叶彼方が無条件の敬意と愛情の全てを向ける唯一の相手　玖渚友だった。

彼方は玖渚友が結成した《仲間》^{チーム}の九人目（彼方自身は8・5人目と自称）であり、最年少のメンバーだった。式岸軋騎のサポートを始めとした様々な業務を手伝いながら、彼方は友の事を「姉姉様」と呼び彼女の駒として動く事に至上の喜びを感じ取っていた。加入当時幼かった彼は、彼女に泣かされる事も多々あったが「姉姉様に泣かされる事が出来るのは自分だけだ」という優越感すら持っていた。尤も自分を含めたチームの面々がとある戯言遣いの代替品である事を知って少なからずショックを受けた事もあったが。

姉姉様が自分を代替品の一種として選んでくれたのなら、それに勝る喜びは無い。

「実は今、池袋で暮らしています。そこで少々調査の方を進めているのですが、綾南さんに調べ物を頼む可能性が出て来まして。姉姉様にこの様なお願いの為に時間を取らせてしまうのは誠に心苦しいのですが、よろしければ連絡先を教えて頂きたいのですが」
『そっか、たっちゃんはいくんの連絡先知らないんだっけ。ぐっちゃんには聞いたの？』

「聞こうと思ったのですが、連絡が取れないのですよ。またどこかで仕事をしているのだと思いますが……」

《凶獣》^{チーター} 『回る鈴木』綾南豹。玖渚友と同じ年で、愛称はちいくん。この銀河系の中において知らない事は無い、と言われる探索者。

史上最強のシーカーである。彼方は彼の協力を取り付けるために、敬愛する玖渚友に連絡を取ったのだ。だが。

『んー、確かに僕様ちゃんはちいくんと連絡取れるけど、ちいくん今アメリカの刑務所に居るんだよねー。国連のデータベースに侵入しようとしたら防衛ラインに引つかかっちゃって。あ、その防衛ライン作つたの僕様ちゃんだけだね』

「僕の知らない所で姉様と綾南さんの攻防が行われてたんですね。というか、姉様の罠に掛かるなんて綾南さんが心底羨ましいですね……」

『そんな訳で、ちいくんは158年ほど刑務所ライフって事になってるからさー。僕様ちゃん経由で良ければ連絡とってあげるよ。面倒なら、ある程度なら僕様ちゃんがやってあげてもいいよ?』

「え?! そ、そんな恐れ多いですよ!! 姉様の手を煩わせる訳に行きません!!」

『なに遠慮してんのさー。あ、じゃあこうしよう! 僕様ちゃん、丁度たっちゃんに頼みたい事があったんだよ。それをこなしてくれたら、報酬としてたっちゃんが知りたがってる事、調べてあげるよ』
「何なりとお申し付けくださいませ、姉様」

自分から頼むのではなく、玖渚友からの依頼をこなし、その報酬として情報提供を受ける。彼方にとっては願ったり叶ったりと言うべき提案であつた。そして何より、玖渚友から直々に頼まれた事を彼方が断るなど、天地が引っくり返っても有り得ない事だつた。

『今、池袋に黒バイクって居るでしょ? たっちゃんには、その黒バイクを僕様ちゃんのとこに連れてきて欲しいんだよ』

「かしこまりました、お任せ下さいませ姉様」

『うにー、相変わらず即断即決だね、たっちゃん! 大好き!』

「有難うございます。姉様のご期待に応え、必ずや黒バイクを姉様の所へと連れて行きましょう。では、今日の所はこれで失礼致します」

「ん、またねー。たっちゃん、大好きだよー！」

「勿論、僕も姉様が好きですよ。それでは」

通話を終了させると同時に彼方は膝から崩れ落ちる。乱れた呼吸を落ち着かせながら、満面の笑みを浮かべた。

「……姉様が、姉様が僕に頼み事をしてくれた……！叶彼方、今日ほど生きてた事に感謝した事はありません……！！」

例えその頼み事の内容が「都市伝説を捕まえて連れてこい」という無茶な注文で有ろうと、それすら些細な事になる。

叶彼方にとっての玖渚友は、零崎叶識にとっての家族と同様であり 全身全霊で愛する為に存在しているのだ。

その為ならば、黒バイクの一人や二人とっ捕まえて引き摺ってでも京都へと連れて行く。誰も居ない校舎裏で、叶彼方は幸せそうな笑顔を浮かべながらそう決意したのだった。

「さて、愛すべき姉様の為に黒バイクと接触しなきゃいけない訳なのですが、そう簡単に出会える訳はありませんね。一旦帰ってあ

る程度調べてからの方が良かったでしょうか。とはいえ、私が調べたところで一般人が頑張って調べた程度の情報しか集まらないでしょうし……いやいや、まずは小さな取っ掛かりから始めるべきでしょう。それがいい、そうしましょう」

黒バイクを求めて池袋の60階通りを徘徊する叶彼方かというと、上がり切ったテンションを抑える事無く独り言のマシंगाントークを展開していた。当初の目的である黒バイクは影も形も見当たらず、彼方は池袋の街中をうろつく来良学園の生徒の一人として街に溶け込んでいる。《同志》^{バーティ}にしても、家賊にしても、年齢や背格好、服装に統一性は無い。同じような制服が闊歩する様を眺めながら彼方は呟く。

「しかし、同じ服装がこうも溢れている姿というのもある種の不気味さを感じますね。暴走族やカラーギャングの類が同じ服装で合わせるのも、こうした見た目での威圧感を増す為なのでしょう。まあ僕にしてみればどうでもいい事ですし、叶識くんにとっても意味の無い事でしょうけどね」

自分のもう一人の人格たる殺人鬼を他人のように扱いながら歩いていると、ふと剣呑な声が耳に入る。どうやら女子生徒数人が誰かを糾弾する様な声だ。彼方が声の聞こえる路地の方へと顔を向けると、案の定聞こえた通りの光景が広がっていた。

「クラス委員になったんだって？なに優等生ぶってんの？」

「なんとか言えよ、中学の時は美香の腰巾着だったくせしてよー」

「なんというか、こんなテンプレ通りの脅迫行為をこのご時世で見かけるとは……姉姉様、普通の世界は意外と普通じゃないようです……って、囲まれてるのは確か帝人君のこのクラス委員さんじゃ

ないですか。……あ、帝人君も居ますね。止めに行く気でしょうか？」

殆ど状況説明の様な独り言を呟きながら、気配を殺しつつ近寄る。杏里を問い詰めている女子生徒も、杏里本人も、そして反対方向から近付いてくる帝人も、誰一人として彼方の存在に気付いていない。叶彼方は考える。さて、ここで自分が出ていくべきか否か。彼方自身は園原杏里に見覚えがあるが、顔見知り以前の問題だ。助ける理由は無いいし、助けない理由も無い。とはいえ、池袋に来て日が浅い自分にとっては顔見知りはある程度多い方が良さだろう。ネットワークが上がってこない情報を拾い上げてくれる可能性が0では無いのだ。しかし、ここで自分が出て行ってしまうと勇気を振り絞っている（と推察される）帝人の行為を無駄にしてしまう。ならば、ここはバランスを取った行動を取るべきだ。

まず、帝人に任せる。それで状況が打破できない状態になった場合に、自分が出ていく。この行動で恐らく間違いは無いだろう。少なくとも帝人の顔は立つし、自分が積極的に動かなくて済むのでデメリットが限りなく少ないのだ。

しかし、この目論見は一人の男の手によって崩される事となる。

「いやあ、よくないなあ、こんな天下の往来でカツアゲとは、お天道様が許しても警察が許さないよ」

帝人の素っ頓狂な杏里への呼び掛けが聞こえたかと思うと、次に別の、若い男の声が響く。緊張感のまるで無い、冗談の様な口調だ。

「イジメはカッコ悪いよ、よくないねえ、実によくない」

「オッサンには関係ねえだろ！」

女子生徒があらん限りの力で不意に現れた若い男に暴言を吐く。
しかし、若い男は

「そう、関係無い」

笑っていた。

「関係無いから、君達がここで殴られようが野垂れ死のうが関係無い事さ。俺が君達を殴っても、俺が君達を刺しても、逆に君達がまだ23歳の俺をオッサンと呼ぼうが、君達と俺の無関係は永遠だ。全ての人間は関係していると同時に無関係でもあるんだよ」

女子生徒は何を言っているのか理解が出来ないかのように、気の抜けた返事を返すだけだった。絡まれていた杏里も、そして帝人もまた同じような表情を浮かべていた。ただ、彼方だけが顰め面で男の発言に聞き入っていた。心底、不愉快そうな顔で。

「人間って希薄だよね」

そう言って、男は女子生徒達に近寄る。

「まあ、俺には女の子を殴る趣味は無いけど」

その手には、小柄なバックが納められていた。女子生徒の一人が肩から掛けていた、高級そうなバックが一瞬の間に奪われていたのだ。その動きを視認できたのは、男の姿を正面から捉える形になっ

た彼方だけだった。帝人がどこか青ざめた表情をしているのにも気付いたが、

（恐らく、刃物でしょうね。紐を切るのに使ったと見えますが動きに淀みが無い。彼はこちら側の人間？いや、プロのプレイヤーなら刃物を抜いた時点で彼女達を切り裂いているでしょうし……）

男の行動が読めず、彼方は更に表情を険しいものへと変化させる。何より男の発言の一つ一つが彼方の癪に障るのだ。人間の関係は、同時に無関係である。そんな筈は無いのだ、と。彼方にとっての“玖渚友”、そして叶識にとっての“家賊”は、例え一方的であるうと、無関係ではない。男の言葉の全てが、自分を嘲笑しているように感じた。例えそれが自意識過剰の被害妄想だったとしても。

彼方の不快感を知ってか知らずか、男は楽しそうに鞆から携帯電話を取り出して

「だから女の子の携帯を踏み潰す事を新しい趣味にするよ」

放り投げた携帯電話が地面に落ちると同時に、その脚を踏み下ろした。プラスチックが碎ける音と、男が放つ機械染みた笑い声だけが周囲に響き。女子生徒達は異様なものを見る視線を男に向けると、悲鳴交じりの罵声を放ちながら逃げ去って行った。

「おっと。帝人君、大丈夫でしたー？」

ちょうど彼方の方へと逃げてきた女子生徒達を避けながら、帝人へと声を掛ける。こちらに気付いた帝人も安心したように笑みを浮かべている。杏里も、ホームルームの最中に居座っていた別クラスの男子生徒だと気付いたらしく、彼方に戸惑いながらも会釈を向け

た。

「飽きちゃった。携帯を踏み潰す趣味はもうやめよう。偉いねえ、苛められてる子を助けようとするなんて、現代っ子にはなかなか出来ない真似だ。そっちの君も、助けようとしたみたいだね？」

「え……」

「まあ帝人君や貴方が居たんで、出るタイミング逃しましたけどね」

杏里が驚いたように帝人を見る。彼方にも視線を向けはしたが、彼方が「帝人が居たから」という事を言うと、再び帝人に目を向けた。帝人はどこかバツの悪そうな、居心地の悪そうな雰囲気になっ
てはいたが。

「帝人君、知り合いの方ですか？大学生……には見えませんね。社会人にも見えませんが」

「おいおい、初対面なのに随分と酷い言い草だね？初めまして、俺は折原臨也。よろしく」

「……叶彼方です。よろしく」

彼方は表情をよそ行きの笑顔で張り付けたまま、折原臨也という名前への反応を押し殺していた。

この男が、情報屋の折原臨也 !!

自分が感じた薄気味悪さや不快感の正体がようやく明らかになったように思い、彼方は内心で納得を感じていた。一方の臨也はといえば、叶彼方という名前に一瞬だけ疑問を感じたような表情を浮かべたものの、すぐに帝人へと向き直る。

「さて竜ヶ峰帝人君、俺が会ったのは偶然じゃないんだ。君を探し

ていたんだよ」

「え？」

「帝人君、伏せて！！」

帝人がどういう事かと尋ねようとした瞬間、身を低くした彼方の叫びが響き渡る。反射的に帝人と杏里が頭を庇うようにして身を屈めると同時に、路地の奥から、“コンビニエンスストアにあるゴミ箱が飛んできて”、臨也の体を直撃した。

「がッ！？」

ゴミ箱がガラン、と派手な音を立てて地面に落ち、動きを止める。臨也は苦悶の声を上げ、バランスを崩して膝を着いた。角が直撃しなかったのが幸いし、臨也はよろよろと立ち上がる事が出来たようだった。そして、投げ込まれた方向を見遣ると、

「し、シズちゃん……」

「いーざーやーくーん」

わざとらしく間延びさせた声に、帝人と杏里もそちらへと視線を向ける。彼方は既にそちらを見ていて、身を強張らせていた。

（冗談じゃないですよ、ホント……こんな殺気の塊、“仕事の時”の軌識兄さんと同レベルじゃないですか……！！）

自身が知る中で“暴力”という言葉をもっとも体現している存在、零崎軌識を思わせるほどの殺気を放つバーテンドー服にサングラスの男。一見すると細身ではあるが、彼方は否、叶識は。その男が“臨也を殺す目的で”さっきのゴミ箱を投擲したのだ、と。本能的に察知していた。

「池袋には二度と近付くなって言わなかったわけかー？いーざーや
ー君よぉー」

叶彼方は　そして、同時に零崎叶識はこう思う。

『とんでもない街に来てしまった』　と。

第四章（後書き）

姉姉様こと玖渚友、そして園原杏里、折原臨也、平和島静雄の登場でした。シズちゃんは今回顔見せ程度の出番になってしまい、ファンの方には申し訳が立ちません……（汗）

彼方（叶識）はデュラララ第一巻の時点では話の大筋には関わる予定はありません。ただ、リッパーナイト以降からは大きく話に関与する予定です。

ご意見ご感想、並びに誤字脱字の報告、お待ちしております。

第五章（前書き）

ようやく、第五章に到達です。

原作本分の再現がメインになっていますが、所々端折った部分も御座います。ご了承ください。

第五章

0

君子危うきに近寄らざるを得ない。

1

「シズちゃん、君が働いてるのは西口じゃなかったっけ？」

「とつくにクビになったさー。それにその呼び方はやめろって言うたろー？ いーざーやーあ。いつも言ってるだろあ？ 俺には平和島静雄って名前があるってよあー」

低い声を出しながら、男の顔に血管が浮かぶ。その姿を見て、彼方はどこか遠い目で乾いた笑いを浮かべていた。

（はは……規格外にも程があるでしょう。この殺気を撒き散らしている人間が普通の世界の住人？ 冗談じゃないです）

叶彼方にしろ、零崎叶識にしろ、どちらも荒事の経験が有り、それなりの修羅場は潜っている。しかし、そんな経験を嘲笑うようにバーテン服の男が見に纏う怒気、或いは覇気は尋常ではなかった。

これ以上この場に居てはいけない。

零崎叶識ならばともかく、今この場に存在しているのは叶彼方だ。“殺人衝動の無い人格”でこの二人が万が一にもこちらに火の粉を

向ける様な事になれば、ただでは済まない。静雄と臨也の二人は軽い調子で不穏な会話を続けていたが、臨也が袖口からナイフを取り出した所で、彼方は不意に我に返った。

「こりゃマズいですね……！」

視線を同級生である帝人と杏里に向ける。二人も彼方と同じ結論に達したようだ。必死に無言での合図を送り合う二人を確認すると、視殺戦を繰り広げる静雄と臨也の横を決死の覚悟で横切って、

「帝人君！委員長さん！こっちです！」

一般人である二人を先導するべく、声を張り上げる。二人はコクコクと頷き、鞆を抱えこんだまま彼方の後を追うようにして路地から大通りへと走り抜ける。ふと後ろを振り向くと、静雄の怒声と何時の間にやら沸いていた野次馬の群れ。そしてそれを掻き分けるように大柄な黒人が入って行くのが見えた。

「人外魔境……ですね……」

少なくとも、一般的な高校生が居ていい現場ではない事は火を見るよりも明らかだった。少しでも遠くへ、と走っていると後ろから息切れした声が聞こえてきた。

「ねえ、ちょッ……待って……息が……苦しい、から……」

彼方が振り返ると、最後尾にいた帝人がスタミナ切れを起こしていた。結局、帝人は全速力で走ったにも関わらず、同級生男子である彼方どころか、杏里さえも抜く事が出来なかった。

「大丈夫だった？」

帝人と彼方は杏里を近くの喫茶店に連れて行き、そこで彼女を落ち着かせようとする。

とりあえずクリームソーダを三つ注文し、その後でちょっと子供っぽかったか、と帝人が反省しようとしたが、

「メロンソーダの緑に、アイスの白。それにチェリーの鮮やかな赤。クリームソーダというのはある種完成された芸術品ですね」

嬉しそうにクリームソーダに浮かんだバニラアイスを味わう彼方を見て、ある意味でこの注文は正解だったようだと考えた。帝人から見ると、落ち着きのある彼方はブラックコーヒーとかの方が似合いそうに思えていたが、彼は意外と甘党のようだった。

「あの……ありがとうございました、さっきは 助けてもらって」「あー、いやいや、いいいい！ 正確には助けたのはあの臨也って人だし！ それに、あの場から逃がしてくれたのは彼方くんが居たからだし！」

「でも……」

こういう時どうしたらいいか、と帝人は完全にテンパっている様子だった。内心で、正臣がこの場に居ない事を悔やむ。彼方は居るが、今はクリームソーダに夢中の様で話を聞く気があるかどうかも分からない。

とはいえ、何もしゃべらない訳にもいかず、とりあえず帝人は会

話を切り出す事にした。

「さっきの人達、同じ中学の？」

その問い掛けに、杏里はコクリと頷いた。

「なるほど……つまり、中学の時にちよっかいを出していた連中がいたけれど、中学の時は美香っていう実力のある子に助けられて、ところがその美香ちゃんがいなくなった途端に昔の奴らがまた来たってこと？」

帝人の推察を聞いて、杏里は身体をビクリと振るわせた。

「な、なんで、知ってるんですか!？」

「い、いや、あの会話体とそうだとしか……」

「わかりやすいですよねえ」

「彼方くん、さくらんぼの茎くわえたまましたり顔して頷かれても……まあいいや、美香って　うちのクラスの張間美香さんの事？」

茶々を入れる彼方にツツコミを入れつつ、帝人が確認するように問うと、杏里は落ち着きを取り戻し、静かに言葉を紡ぎ始めた。

曰く。彼女、張間美香は入学式の日以来行方不明　正確には、傷心旅行に行くと言って杏里と実家にメールをしてくるだけの状態が続いているらしい。どちらにせよ、一歩間違えば警察沙汰にもなりかねない状態が続いているようだった。

「傷心旅行？何かあったの？」

「それは……」

「まあ、傷心旅行というからには失恋でしょうねえ。あ、帝人君。

アイス溶けかけてますよ？零れないように貰っておきますね」

杏里が口籠ったにも関わらず彼方が端的に核心を突いてしまった。身も蓋も無い言葉だけに飽き足らず、勝手に帝人のクリームソーダからアイスを半分ほど奪っていった彼方の姿に、帝人は「この図々しさが素なんだろうなあ」とか思ったが、今は杏里の事が先決だった。

「大丈夫、僕は誰にも言わないし、言う様な奴は今は子連れのお父さんと不倫の真つ最中だし、もう一人はアイスのが重要そうだから」
「帝人君、サラッと正臣の居ない理由バラしてどの口が堅いって言うんですか。あと、重要なのはアイスだけじゃないです。というわけでお姉さん、このホットケーキセットを一つ追加でお願いしますね。ドリンクはアイスココアで」

口の軽い事を示しながら、同時に口の堅さを主張する帝人。それを指摘する彼方ではあったが、杏里はその指摘よりも平然と追加注文をする様に気を取られたようだった。そして、暫く考えてから口を開く。

「あの、驚かないで聞いてくれますか？」

「さっきみたいなのを見た後じゃ、大抵の事は驚かないよ」

「全くです」

帝人の言葉に彼方も頷く。そんな二人の笑顔に安心したのか、杏里は単刀直入に事実を告げた。

「張間さんは」

「ストーカーなんです」

帝人は健やかな笑顔を浮かべたまま、口から溶けかけたアイスを噴出した。

同時に、彼方が笑顔を張り付けたまま、手に持ったフォークを床に落とした。

3

張間美香の行ったエキセントリックな行動は、相当数の奇人変人に顔の利く彼方ですら啞然とさせるものだった。

ストーリー癖と、その異様なまでのポジティブシンキング。成績良好でそれなりに金持ちの家の娘のやる事ではない。果たして自分の知り合いを総浚いしても、彼女とタメを張れる人物は何人居るだろうか。いや、居るには居るが、ベクトルが違う人間ばかりだ。張間美香とやらの斜め上を通り越して垂直上昇気味な超絶前傾思考と同ベクトルで同レベルとなると、叶彼方と言えども中々に見当たらない。

しかし、“零崎叶識”には一人心当たりがあった。
家賊に対し、変態的なまでに真っ直ぐな愛を向ける男。

《自殺志願》マインドレンデル 零崎双識。

零崎一族の長兄たる彼の家賊愛は、ある意味で彼女に相通じるか

もしない。特に、人識兄さんに対するそれは、張間美香が矢霧誠二に向けるそれと大差ない気がしてきた。

自分自身が零崎と化してまだ間もない頃だろうか。竹取山で行われた一戦で、人識兄さんを参加させるために双識兄さんが取った行動は、流石の僕も引きました。ドン引きです。猿轡したいなら布でいいでしょう。なんでボールギャグなんですか。趣味ですか、双識兄さんの。

その後、双識兄さんは女子中学生のメル友が出来たとハシャいきましたね。携帯メールの送信容量ギリギリの文章を短文のノリで送り付けてたそう。あれ？殺人鬼であるのを差っ引いても双識兄さんのが変態な気がしてきましたよ？おかしいですね？

まあ仕方ないですね。だって双識兄さんですもん。双識兄さんが変態なのは素敵ですし頭痛の種でもあります。が、僕の責任ではないです。強いて言うとならば、その時一緒にいた軌識兄さんのせいです！

「それをわざわざ人に言うのが、一番ずるいと思う」

一瞬、謎の言い訳の泥沼にハマっていた自分への言葉か、と彼方がハッとした表情で帝人へと視線を向ける。しかし、その視線は真っ直ぐ杏里の方へ向いていて。

「なんだか、それで誰かに許して貰おうとしてるみたいだ。張間さんより上を目指そうっていうのは正しい選択だよ。だから、もっと胸を張って堂々としてればいいんじゃないかな」

彼方は少し意外そうに帝人を見る。気弱な少年かと思えば、意外としつかりした物の考え方をしているようだった。本音をストレ-

トにぶつけていながら、彼女の悪い部分を端的に示し 道を示している。

「……帝人君、君の天職はカウンセラーかもしれませんねえ」

ボソリ、と彼方が呟く。え？という表情で帝人がこちらを向くが、彼方は素知らぬ顔でホットケーキに齧りついてた。

一方の杏里はと言えば、怒るでも悲しむでもなく、少し寂しそうな笑みを見せていた。

「そうですね……ありがとうございます」

4

その後。喫茶店を出る際、彼方は自分の食べた分だけ帝人に渡して（クリームソーダ三百五十円＋ホットケーキセット六百五十円。丁度千円になるように注文した）、一足先に二人と別れる事にした。気を利かせた訳ではないが、どちらにしろ自分は彼らとは別のクラスであり、件の張間美香に関しても二人以上に関わる事は無いだろう、という判断だった。

「しかし、今日の疲労度は尋常じゃないですね……例の二人の“戦争”だけでも十分イレギュラーな事態だというのに、まさか同級生に現役ストーカー犯が居たとは。誰ですか、“四つの世界”の枠組みを考えた奴は。一度池袋に来てから“表”の意味を再定義しろと言いたいところです。やれやれ……」

ブツブツと独り言を言いながら、若干周囲の白い目を浴びつつ歩

く彼方。池袋に根を下ろしてまだ数日だと言うのに、音を上げそうになっている自分が居る事は、認めたくないが事実だった。

彼方は回想する。かつて姉様たる玖渚友の御旗の下、馬車馬のように裏世界と電腦世界で駆けずり回った日々を。

或いは、零崎一族の名の下、暴力という名の死を振り撒いて居た日々を。

それらが無い日常。叶彼方は、同時に零崎叶識は、一般人としては何も持たない少年だった。

しかし、池袋と言う街は、彼をそつと見守る　　筈もなく。更なる混沌へと巻き込もうとするだけだった。

「……………」

「……………はあ……………！つ……………！！」

「……………！？」

彼方の横をすり抜けるように、一人のパジャマ姿の少女が走り去って行った。同時に驚愕の表情で彼方は走り去った少女を目で追おうとして　　不覚にも見失ってしまった。

他の通行人は彼女に然程興味を持たないが、表面的にしか見ていないか、どちらかだった。確かに、街中でパジャマ姿というのは異様ではあったが、彼方が　　否、この場合は零崎叶識が、驚愕したのはそんな部分では無い。

「今の彼女の首の傷　なんですか、アレは……！あんな……“一度切断してもう一度無理矢理繋げたような傷”、普通ならば有り得ないでしょう　？！」

人体に無数の線を引き、切り刻んで殺す殺人鬼。《アートライナー白線細工》零
崎叶識。

傷という物を必要以上に身近に見てきた彼だからこそ、彼女の首の傷の異常さを即座に察知した。

「やはり……この街は、狂ってる」

そんな異常な彼女と、殺人鬼ですら雑踏の中に飲み込んで　池袋の街に、夜が訪れる。

第五章（後書き）

原作第一巻、8章まで終了です。第一巻の間は零崎としての動きよりも《同志》^{バーテイ}としての動きが多くなりそうです。

最後に。感想を頂き、真に感謝感激です。返信すらなかなか出来ませんが、一字一句漏らさず読ませて頂いております。

引き続き、ご意見ご感想、誤字脱字の指摘、お待ちしております。それでは。

第六章（前書き）

お待たせしました。

10000アクセス並びに2500ユニーク突破しました。

現状、デユラララ！の原作に沿った展開が続いておりますが、これだけの方に読んでいただき光栄の極みです。

それでは、どうぞ。

第六章

0

蟻地獄はもがけばもがくほど、下に落ちていく。もがかなくても、落ちるけど。

1

「参りましたね、確かにこつちに行つた筈なのですが」

一瞬だけすれ違った首に傷の娘を探し、彼方は人の流れに逆流するよつに街を走っていた。

普通の人間ならば、彼女の首の傷を見ても気味悪く思つたり、或いは同情染みた感情を向けるだけだろうが、彼にとってはそうではない。特に、彼のもう一人の人格たる零崎叶識にとっては。本来ならば、こうして追ふことすら避けなければならぬのだが、叶識の懸念が正しいかどうかを確かめねばならない。

「まさか死吹がこんな所でウロウロしてるとは思えません……」

傷娘を見て真つ先に浮かんだ叶識の懸念。それは、彼女が呪い名六名の一角である“死吹”である可能性だった。身体支配を駆使する、《死配人》。《掃除人》たる天吹の対極の対極の対極に当たる存在だ。

呪い名について叶識が知る事実は少ない。ただ、一部に関しては

同じ呪い名の罪口未摘から話を聞いた事はある。かつて《裏切同盟》と呼ばれた呪い名六名から一名ずつから構成された想定外の同盟。尤も、現実存在したかも怪しい同盟ではあったが、その中の一人に死吹も当然存在し、その死吹は、体中が傷だらけであったという。

その情報を鵜呑みにするつもりは一切ないが、池袋という街もまた裏切同盟同様に想定外の街だ。どんな小さな懸念であろうと、現実と化してしまう危うさがある。警戒はしないよりするに越した事はないのだ。

「見失いましたか……彼女が死吹であろうとなかろうと、何かしらの情報源にはなりそうだったのですが」

表通りから少し外れた路地で立ち止まり、溜息を吐く。ただ無為に走って、無駄に体力を浪費しただけだった。

しかし、池袋の街は叶識の徒労を無駄にしようとは思わなかったらしい。

「あれは……」

叶識の視線の先に居る二人の人物。それを見つけた瞬間、叶識は意識を“叶彼方”へとスイッチする。あの二人に殺人鬼としての顔を見られるのはマズイ。そう考えた瞬間に、人格の切り換えは完了していた。

そう、彼方が路地で見たのは。

「あの化物バーテンダーと、噂の黒バイク……!？」

関わり合いになりたくない人物と、関わり合いにならなくてはいけない人物が会話をしている光景だった。

どうするべきか？見れば服装は散々に切り刻まれた形跡があり、恐らくそれは“あの”折原臨也によって付けられた傷だろう。それが平気な顔でこうして黒バイクと談笑（？）している様子から、大きな怪我は負っていないと推測される。今の彼を見るに、先程までの様な強烈な殺気を撒き散らしている訳でもない。むしろ、今の彼は正しく“普通の世界”の住人だ。見た目こそ、少々派手で近寄り辛い雰囲気こそあるが、それを言えば、“一賊”や“同志”の面々の方がよっぽど近寄り辛い。

そして、黒バイク。生ける都市伝説。そして、我らが“姫姉様”が御所望の相手だ。

ならば、行くしかない。いや、行く以外の選択肢など最初から存在などしていないのだ。

2

「　　そういやあいつ、来良学園のガキに何か話しかけてた様な」
「それって、僕の友達の事ですか？」

一通りの会話が終わり、静雄が不意に漏らした疑問に応える声があった。

礼儀正しい、真面目そうな少年。二人が視線を移した先には、叶

彼方が小さく一礼をしていた。

「その、騒動に巻き込まれた子の、友人です。先程は助けて頂きありがとうございますでした」

丁寧な謝礼の言葉を掛ける彼方に、静雄は少しだけ呆気にとられていたがすぐに何の事かを思い出して、

「ああ、あれは臨也が居たからぶん殴ってやろうと思ったただけでさ。別にあの来良のガキを助けるつもりなんかなかったんだけどな」

「それでも、あの場から逃げる切欠を作ってくれましたから。本当は、僕が助けに行こうかと思ったんですが……ゴミ箱が飛んできて驚いてたら、タイミングを逸してしまいました」

「あー……お前、臨也が居た方に居たのか。悪いな、巻き込まれなかったか？」

「いえ、大丈夫でした」

誤解されがちだが平和島静雄という男は普段から殺気を撒き散らすような横暴な男ではない。ただ、理屈をこねくり回したりするタイプの。例えば、折原臨也のような人間が大嫌いなだけだ。今現在、彼が苛立っていないのも黒バイクが口数の少ない人間（？）だからに他ならず、普通より少しお喋りな人間であれば、静雄が苛立つ事も多々ある。

しかし、彼方は静雄の機嫌を損ねる事は無かった。彼が話しかけてきた理由が、友人を（結果的に）助けてくれた静雄への謝意からだった、というのもある。それプラス、あの暴れっぷりを見ておきながら恐れを一切見せず、かといって謙ってご機嫌を取るような態度を取る訳でもない。素直で裏表の無い態度で相對していたからこそ、静雄が怒りを覚えずに会話を続けているのだった。

（驚いたな。静雄とちゃんと会話出来る高校生なんて、滅多にいないよな）

黒バイクも二人の会話を眺めながら、そんな風に思う。静雄を一切知らないならともかく、彼は静雄が暴れた所を見ていてなお、自然体で話し掛け、談笑している。肝の据わった高校生も居るもんだな、と。

「あ、申し遅れました。来良学園一年の叶彼方、といいます」

「平和島静雄だ。ま、池袋で取り立て屋みてーな事してる」

「よろしく願います。ええと、そちらの方は……もしかして」

彼方が黒バイクへと、おずおずといった感じで問いかけると、黒バイクはPDAを取り出して文字を入力する。

『君は、私の事をどれくらい知っている？』

その言葉を見ると彼方は少だけ考えて、少しの間を置いてから答える。

「……都市伝説です。エンジン音の無いバイクを操る黒い影、と」

言いながら、自分もポケットから携帯電話を取り出し何か文字を入力する。そして、それを黒バイクへと向けた。

『貴方が正真正銘の“化け物”である、と聞いています』

それを見た黒バイクが明らかに戦慄するのを彼方は確認する。表情にこそ出さないが、これは事実のようだ、と確信する。

「……私はセルティ・ストウルルソンという。そして、君の言葉は事実だ。私は首が無い　デュラハンだ」

「そうなんですか……驚きました」

「誰から聞いた？君が何故、それを知っている？」

「僕は《同志》^{パーティ}……いや、《仲間》^{チーム}の一員だったんです。その情報筋から、貴方の事を聞いていました。池袋に来る前に」

彼方は事実を淡々と述べる。セルティに関する情報を自分に渡した軋識は、式岸軋騎でもあるので情報源として嘘を言った訳ではない。尤も、デュラハンであるというのは流石に予想外も良い所だったが。何にせよ、相手がそれを真実として認めた以上、こちらも相応の誠意を以て答えるべきだ。

「チーム？カラーギャングか何かか？」

「いえ、テロリストです。サイバーテロリスト集団」

「……信じられないな」

「よく言われます。ですが、事実です。裏の事情に明るい方に聞けば、確認は取れますよ。《逃避行路》^{エスケープルート}という名は、それなりに知られている筈ですから」

セルティは完全に考え込んでしまっていて、彼方もそれを見守るしか出来ない。セルティが答えを出す前に、不意に静雄が呟いた。

「何の騒ぎだ？」

彼方は緊張の糸を張り詰めたまま、セルティの言葉を待っていた。ここは正念場だ。なんとしてもセルティの信頼を勝ち取り、玖渚友の元へ連れて行かねばならない。これは任務などという生易しいものではない。義務だ。確かにいきなりセルティの秘密を知っている事を告げたのは悪手だったかもしれない。しかし、言わずに黙っておいてボロが出た時の方がよっぽどデメリットが大きい。

「出来れば、貴方と直接連絡が取りたいんです。メールアドレスを教えてくださいませんか？」

そう尋ねた瞬間、話から外れて居た静雄が何かに気付いたように呟いた。同時に、セルティと彼方もそちらへと視線を向けた瞬間。

「あ、あれは……」

先程まで追っていた死吹疑惑の少女。こんなところに居たのか、と思うより先にセルティが飛ぶように駆け出し、それに驚いた静雄と彼方が続く。セルティが彼女の手を掴んで勢いよく振り向かせる。同時に、少女が悲鳴を上げた。

周囲の視線がこちらへと突き刺さる中、静雄と彼方が助け船を出すべく少女へと近寄り、

「あー、落ち着いてください。俺達は別に怪しいもんじゃないから」

彼方は一つの失策をした。第一に、いきなり飛び出したセルティに驚き周囲への警戒を怠った事。

第二に、精神を彼方から叶識へと切り変えていなかった為に、その“殺気”に気付かなかった事。

「あ……？」

彼方は静雄へと視線を向けると、自分と同じ制服姿の男子生徒が、静雄の太腿にボールペンを突き刺していた。

「な……！？」

「ああ……？」

「彼女を離せ！」

気が付けば静雄の太腿に刺さったボールペンは二本に増えていて、加害者たるブレザーの青年が三本目を手に持っている。

青年の声にセルティがこちらへと振り返り、流血沙汰が起こっている事に驚いていると、その隙を突いて、首に傷の少女がセルティの手を振りほどいて路地の奥へと逃げだしてしまっていた。

「良かった……」

「どこがですか。というか、何考えてるんですか、アンタ」

逃げ出していく彼女を見やり、ボールペンを構えたまま心から安堵したような声を漏らす青年に、彼方が無理矢理自分を冷静な思考へと叩き直す為に敢えて余計な突っ込みを入れる。同時に、これ以上の暴拳を行わせる前に彼を止めようと。そして、何らかの理由で傷の少女を捕まえていたセルティもまた彼女を逃がす原因となった青年へと詰め寄るが、二人を制するようにして静雄が

「あ、俺は大丈夫だから。酒のせいであんまり痛み感じない。だからいいよ、行って。よくわかんないけどさ、おっかけなきゃヤバいんだろ？あと、彼方だっけか。お前も下がってなよ。悪いな、また巻き込んで」

そして、サングラスを胸ポケットにしまいながら自分の頬をピシヤリ、と叩いて。

「ハッハあ、一度言ってみたかったんだ。『ここは俺に任せて先に行け！』だよ」

「……本来なら言った本人の死亡フラグなんですが、それ……」

静雄に聞こえないように彼方は小さくボヤク。どちらかといえば、死亡フラグが立ったのは自分と同じブレザーの青年の方に間違いないだろう。

何にせよ、セルティは静雄の厚意を受け取る事にし、手を合わせて礼を言うような仕草を見せた後　黒いバイクを“嘶かせて”少女を追う。

「待てっ！」

ブレザーの青年がそれを追おうとするのを、

「いや、お前が待て」

その襟首をムンズと掴み、静雄が青年を引き寄せる。

「あの子、君の彼女？」

「そうだ！俺の運命の人だ！」

もかく様に暴れながら青年　矢霧誠二は、自信に満ちた声で応える。

「……彼女に、一体何があったんですか？」

静雄はあくまで冷静なまま、彼方の質問に相手がどう答えるか見定めようとする。

「知るか！」

「じゃあ、彼女の名前は？」

「そんなもの知るか！！」

あ、終わった。“叶識”は、その瞬間に理解した。あの時、臨也に対して向けられていたものと同じ殺意が周囲に充滿している事に。そのあからさま過ぎる殺気は、素人である野次馬達にも伝播する。

そして、次の瞬間 平和島静雄が、キレた。

「なあんだああそりゃああああ ツ！！」

そして、その瞬間。青年が宙を舞った。

「えええ……………」

「嘘ッ！？」

前者の声は、「もう勘弁してくれ」と言わんばかりの彼方の声。後者は野次馬が放ったものだった。

静雄は、青年の体を何の躊躇いも無く“車道へと向けて”ブン投げたのだ。停車中のトラックの荷台に直撃する誠二の体。

「静雄さん、お言葉ですが 僕、貴方に会った時点で巻き込まれてます。全てに」

彼方の嘆きにも似た呟きは、誰に聞かれる事も無く街へと消えて行った。

第六章（後書き）

中途半端な所で切ってしまいましたが、次話は戯言サイド寄りの話になる予定です。

ご意見感想、誤字脱字のご指摘、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7677m/>

零崎叶識の人間心理

2011年3月8日00時17分発行